

コラム No. 174

受験勉強を通して学んだこと

二〇一六年七月十九日

江尻 桂子

私が通った高校は、自宅から徒歩十五分のところにある、地元（兵庫）の県立高校だった。山々に囲まれた閑静な住宅街のなかにあり、自由でのんびりとした校風だった。生徒の多くは四年制大学に進学したが、二年生の終わりにくまでは受験を意識することもなく、皆、部活やサークル、球技大会に文化祭と、さまざまな活動を楽しんでいた。私自身もバンドを組んでベースを弾いたり、友人とお泊り会を重ねたりして、高校生活を満喫していた。

ところが高校二年生の夏のこと。校内模試の結果、志望校の合格判定がそろってE判定だった。親はひどく落胆し、自分でも何とかしなくてはと焦った。悩んだ末、私は、F先生に相談に行くことにした。F先生は「真面目一徹」という雰囲気女性の先生で、生徒にも厳しかっ

た。しかし、国語教員としての仕事のかたわら「源氏物語」の解釈に取り組んでいることを知り、私はひそかに尊敬の念を抱いていた。放課後、私は職員室にF先生を訪ねて今の状況を語った。模試の結果がひどかったこと、これから気持ちを立て直して勉強したいこと、大学ではどうしても心理学を学びたいこと、東京の大学に行きたいことを伝えた。F先生は、「うんうん」とうなずきながら聞いてくれ、こう言った。

「あんたなら、やれるぞ」

「本気になって頑張ったら、どこの大学でも行けるぞ」

十分すぎるほどありがたい言葉だった。しかしそのときの私は、それだけでは物足りなかった。そして、畳みかけるようにF先生にこう尋ねた。

「先生、どこでも行けるって、ほんま？」

「それやったら、もし今から必死になって勉強したら、わたしでも、『東大』に行けるんかな？」

当時、私たちの高校から東大に合格するのは二〜三年にひとりの程度だった。そう考えると、模試でE判定の並ぶ私の質問（というより要求に近い）は、かなり無茶なものだった。しかし、

F先生は即座にこう答えた。

「もちろんや！」「あんたやったら行けるぞ！」

結局、私は東大を受験しなかった（※1）。

しかし、あの時F先生がそう答えてくれたことは、当時の私にとっては大きな出来事だった。自分の可能性を信じてくれる先生がここにいる。そのことに感動した。西日の差し込む職員室。応接セットのソファに向かいあったF先生が、「あんたやったら・・・」と言ったその瞬間を、今でも私は鮮明に思い出すことができる。

こうして高二の秋には受験勉強を始めたものの、成績はなかなか上がらなかった。模試の結果が出るたびに、私は情けなくて、しょっちゅう泣いた。何より辛かったのは、一生懸命やっているのに、結果が出ないことだった。

（研究もまったく同じだ。成果を世に出すまでに三〜五年はかかるし、途中で行き詰まることもあり、日々、自分を見失いそうになる。）

ようやく明るい兆しが見え始めたのは、センター試験も終えた高三の二月だった。初めて見る問題に、なんとなく既視感を覚えるようになってきた。試験勉強というものは、一定量をこなせば、だいたいの問題パターンが見えてくる。

そのことを私は知った。

「もし何かをやり遂げたいなら、人より時間をかけ、量をこなすこと」。

このことが、私が受験勉強から学んだことの一つである。そしてこの教訓は、その後の研究生活にも活かされている。

なんのために受験勉強はあるのか。

そう問われれば、「大学での学びの基礎となる知識や思考力を身につけるため」というのが一つの答えだ。しかし、それ以上に大切なのは、今後の人生をより良く生き抜くための「自分なりのやり方」や「知恵」を身につけることだと思う。

本音を言えば、受験生には高校三年生の春まで妥協することなく挑戦してほしい(どこの大学を狙うにしてもである)。そして、私が出会ったF先生のように、どんな高校にも必ず、生徒を全力でサポートしてくれる先生がいる。そんな「正義の(生徒の)味方」みたいな先生を早めに見つけて、大いに指導を受け、励ましてもらってほしい。最終的な結果がどうであれ、そのようにして過ごした日々は私たちを大きく成長させ、その後の人生を何倍にも豊かにしてくれるのだから。

※ 東大を選ばなかった理由はいくつかあるが(もちろん学力の問題は大きい)、一番の理由は、当時、お茶の水女子大学では「心理学専攻」として入学選抜が行われていたため、そこに合格すれば、確実に一年次から心理学を学べたことである(東大では一般に「進学振り分け」を経て、三年次から専門分野に分かれる)。ほかに、少人数制でより丁寧な指導が受けられたことや、都心でありながら緑が豊かで静かなキャンパスであったことも、お茶大を選んだ理由のひとつだ。

(えじり・けいじ)